

ソグディアナの都市を探る

—ウズベキスタン共和国クルゴン・テパ遺跡発掘調査(2023年度)—

村上 智見 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター特任助教
ベグマトフ・アリシエル サマルカンド国立大学准教授
サンディボエフ・アリシエル サマルカンド考古学研究所研究員
マハマディエフ・ガイラット サマルカンド国立大学博士後期課程
アリモフ・ナヴルズ サマルカンド考古学研究所博士後期課程
寺村 裕史 国立民族学博物館准教授
宇野 隆夫 帝塚山大学客員教授

Exploring Urban Centers in Sogdiana: Excavations at Kurgon-Tepa in Uzbekistan (2023)

MURAKAMI, Tomomi Assistant Professor, Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University
BEGMATOV, Alisher Associate Professor, Department of Archaeology, Samarkand State University
SANDIBOEV, Alisher Research Fellow, Samarkand Institute of Archaeology
MAHAMADIEV, Gayrat PhD candidate, Samarkand State University
ALIMOV, Navruz PhD candidate, Samarkand Institute of Archaeology
TERAMURA, Hirofumi Associate Professor, National Museum of Ethnology
UNO, Takao Visiting Professor, Tezukayama University

1. はじめに

本プロジェクトではソグド人の歴史と文化を明らかにするため、2022年度からウズベキスタン共和国クルゴン・テパ遺跡において発掘調査を実施している。クルゴン・テパ遺跡は、ソグディアナにおける中心的都市の一つであるクルドル・テパ遺跡の領域に含まれていたとみられ、ソグド都市の様相を知る上で重要であるとともに、当該遺跡は中世アラビア語史料にみられるサンジャルファゲン寺院に比定されていることから、発掘調査によりこの遺跡の性格を明らかにしようと試みている。当該遺跡はシタデルとその周りを取り囲むシャフリスタンとみられる遺構の一部が良好な状態で残存しているが、近年になって人為的な破壊が進んだことから現状の記録が急がれた。発掘調査を行うことで破壊行為に対する抑止力とし、遺跡を保護することも重要な目的である。

2022年度は遺跡周辺の踏査を実施すると共に、破壊が進むシャフリスタンにおいてトレンチ1・2を設けて発掘調査を行い、遺跡のおおよその年代や規模を明らかにした。2023年度は遺跡の性格をさらに明らかにするために、当該遺跡の主要部に当たるシタデルを調査した。

2. 遺跡の概要

クルゴン・テパ遺跡(39° 26' 57N 67° 08' 59E)はサマルカンド市から南東に約30 kmのウルグット地区エションラヴォット村に位置する。当チームが2022年度に発掘調査を行うまで学術的な調査が行われたことはなかったが、シタデルが良好な状態で保存されていることや、中世アラビア語資料に登場する寺院跡に比定されるなど、重要な遺跡として認識されていた。遺跡の現存部分は主にシタデルとそれを囲むシャフリスタンの一部であるが、昨年度の踏査によってシタデルの西ないし西南部に残存している、現在は墓地として利用されている4か所が、クルゴン・テパ遺跡のシャフリスタンまたはラバットを成した可能性が高いことが明らかになった(図1)。西南部に位置する最も小さい墓地は「ザンジルバグ」と呼ばれており、アラビア語史料にみられる「サンジャルファゲン」および中世後期のワクフ関連書類にみられる「サンジャルフィガニ」に比定されている。「サンジャルファゲン」の「ファゲン」はソグド語で寺院を意味することから、当該遺跡全体が寺院であったか、もしくは当該遺跡の領域内に重要な寺院があった可能性がある(村上ほか2023)。「サンジャルファゲン」の「ファゲン」は仏教寺院を意味するものと

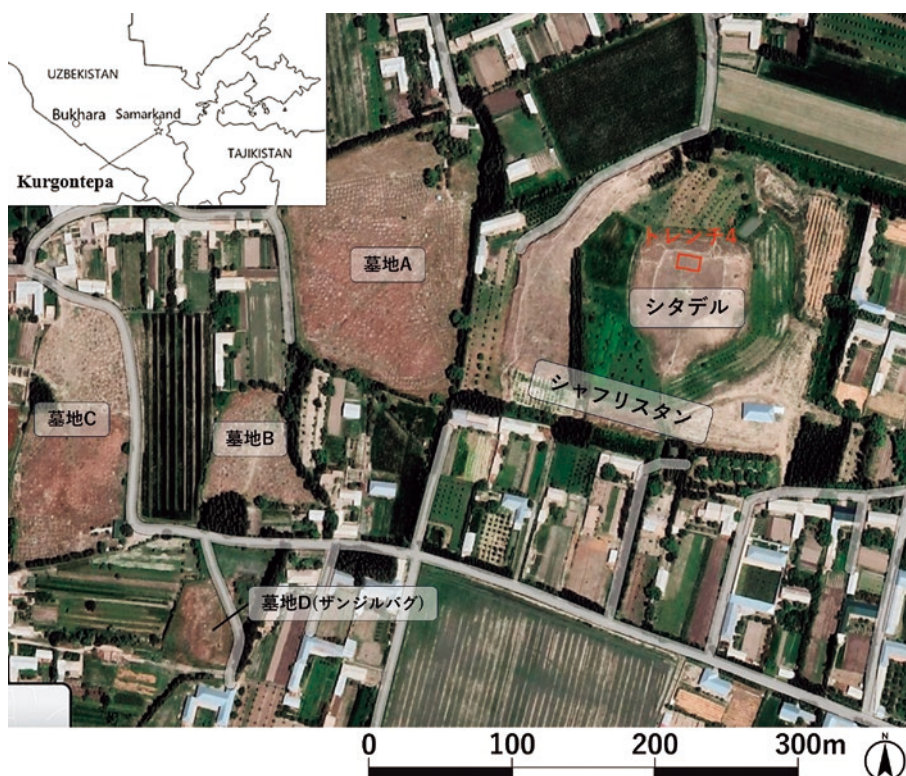


図1 クルゴン・テパ遺跡全景とトレンチ4の位置

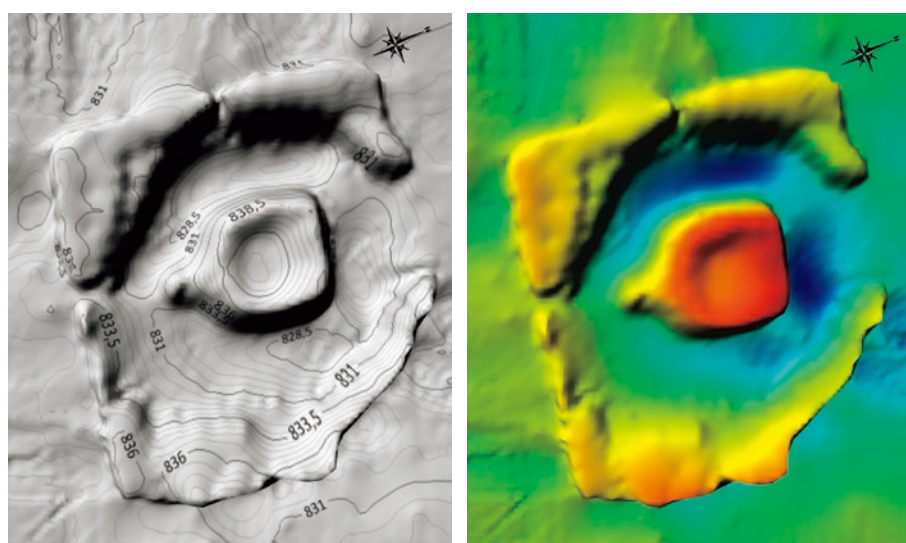


図2 クルゴン・テパ遺跡シタデルとシャフリスタンの一部(三次元モデル図)

考えられるが、ソグディアナにおいては後にゾロアスター教を含む寺院全般を指すようになった可能性もあり、当該遺跡が仏教寺院であったのかゾロアスター寺院であったのかを名称から判断することは難しい。

クルゴン・テパ遺跡のシタデルは当該遺跡において唯一完全な状態で残存している。シタデルの高さは約14 m、上部は約50×50 m、底部は約86×110 mの四角形を呈する。シタデルの南側中央には通路状のくぼみが確認でき、シタデルへの入り口であったと推定さ

れる。さらにシタデルを囲む約20～55 mの堀を隔ててシャフリスタンの一部が残存している。シタデルおよびシャフリスタンを含めると、遺跡は約1.8 ha(堀も含めると約3.8 ha)が残存している(図1、2)。

2022年度の調査では、シタデルを囲むシャフリスタンの2地点において発掘した結果、イスラーム以前の7～8世紀、およびイスラーム以降の11～12世紀頃にこの遺跡が利用されていたことが明らかになった(村上ほか2023)。

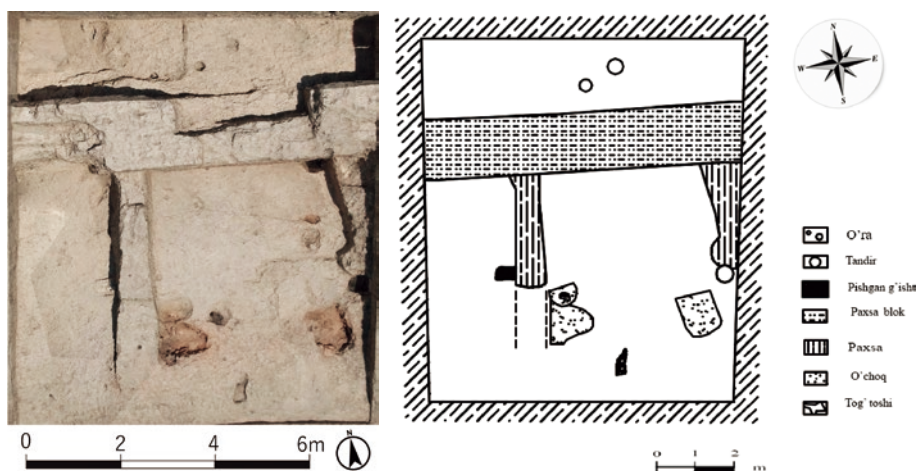


図3 トレンチ4の平面図



図4 壁の被熱痕(南から)

3. トレンチ4

3-1. 7～8世紀の遺構

今年度はシタデルの性格を明らかにするため、最も重要な部屋が位置していたと推測されるシタデル最奥部(北側中央部)に東西11.75m、南北10mのトレンチ4を設定した。表土を剥いだ直後に幅約2.1～2.2mの壁が確認された。さらに掘削を進めると、壁で仕切られた二つの部屋と、さらに壁を隔てて北側に通路があることが明らかになった(図3)。壁は粘土を固めたブロック(パフサ)および日干しレンガ(約50×25×8cm)を組み合わせたものであり、レンガの規格から見て7～8世紀頃に設けられたものと推定された。これは昨年度のシャフリスタンにおける発掘調査で確認した第一建設期と同時期である。この壁はトレンチ4の幅(東西幅10m)を超える長さであり、今年度調査では壁の東西端を確認することはできなかった。壁は最も高い部分で約1.3mが残存していた。さらにこの壁の北側には、壁に並行して東西に延びる通路状の空間が確認できた。この空間より北側の構造はトレンチ

外のため明確ではないが、シタデルの縁にあたることから、通路を挟んでシタデルの外壁があったとみられる。

3-2. 11～12世紀の遺構

東西に延びる壁の北面には藁を含んだ漆喰が確認でき、南面は強く被熱を受けていた(図4)。このことから、この部屋は7～8世紀以降に建設され何らかの理由で火災に遭ったが、数世紀後のカラハン朝期に藁を含む漆喰を被熱面に塗って補修し、再利用されたことが判明した。床面からはカラハン朝時代後半の11～12世紀頃の土器片が出土した。

通路の床には用途不明の二つの穴が設けられていた。一つは直径32cm、深さ約18cm、もう一つは直径24cm、深さ約16cmである。壁から南は7～8世紀には一つの部屋であったが、上述の壁よりも幅の狭い壁を南北方向に設置することによって仕切られた11～12世紀頃の部屋が二つ確認できた。東側の部屋からは竈址が確認されたことから、シタデルでも生活が営まれていたと推定された。南壁は保存されていないが、南北に配置された壁の長さが3.8mであること



図5 取手付き壺

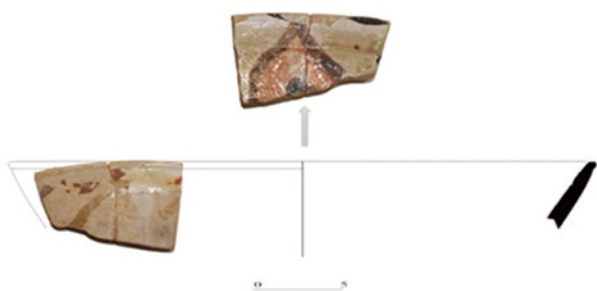


図6 釉薬付き皿



図7 釉薬付き皿



図8 その他土器実測図

西に焼きレンガ(30×16×4~5 cm)でできた長さ55 cm、幅30 cm、高さ15 cmの遺構が確認された(図3)。

3-3. 出土遺物

トレンチ4の調査では主に11~12世紀頃の土器片が出土した(図5、6、7、8)。これらはカラハン朝時代の壺や大皿などであり、緑、白、黒、茶色などの釉薬をかけたものも含まれている(図5・6・7)。また、食用とみられる動物の骨も出土しており、現在これらの鑑別を行っているところである。

4. まとめ

本年度の調査では、シタデルの一部の構造を明らかにすることができ、シタデル最奥部の部屋が7~8世紀に建設されたこと、それ以降に火災に遭ったこと、カラハン朝期に修復され再利用されたことなどが明らかになった。昨年度のシャフリスタンの調査においても、7~8世紀と11~12世紀頃の2段階の生活址を確認しており、シタデルもシャフリスタン同様、カラハン朝期まで利用されていたことが明らかになった。シタデルの火災については、いずれの時代に起きたものかは今回の調査では明らかにすることができなかった。

から、部屋の大きさは5.4×3.8 m程度と考えられる。東壁に沿って設置された竈は円形を呈しており、直径64 cm、竈壁の厚さ2.5 cm、上部は残存していないが高さは33 cmである。

なお、部屋の南部には竈址のような痕跡が2~3か所確認されたが、これらは近年地元の人々がナブルズ祭りの際に伝統料理を調理した際のものである可能性が高い。西側の部屋は保存状態がよくないことからその機能は不明であるが、部屋の東側中央部辺りから東

ソグディアナは8世紀初頭にウマイヤ朝による攻撃を受けており、クルゴン・テパ遺跡の火災もそれと関連するものかどうか、今後さらに検討していく必要がある。

昨年度のシャフリスタン調査では、カラハン朝期における再利用以前のソグド期の層を確認できたことから、おそらくシタデルのトレンチ4においても、カラハン朝期の床のさらに下層にソグド期の層が存在するものと推測される。当該遺跡の性格を明らかにするためには、シタデルにおいても7～8世紀の層を発掘する必要があるだろう。

※本研究はJSPS科研費23K00928、JP23H00703の助成を受けた成果の一部である。

■参考文献

- ・村上智見、ベグマトフ・アリシエル、サンディボエフ・アリシエル、フジャモフ・サナット、マハマディエフ・ガイラット、アルジエフ・コムルジョン、宇野隆夫、寺村裕史 2023「ソグディアナの都市を探る—ウズベキスタン共和国クルゴン・テパ遺跡発掘調査(2022年度)—」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』94-97頁 日本西アジア考古学会。
- ・Вяткин В. Л. 1902 Материалы к исторической географии Самаркандского вилайета // Справочная книжка Самаркандской области. Вып. 7. Самарканд.
- ・Сандибоев А. Н. 2021 Илк ўрт асрларда Маймурғ. Тошкент.